

12 総合学習・生活科分科会報告

はじめに

本年度は 4 名の報告者から 5 本のレポートが提出され、検討を行った。報告は以下のものであった。

- ・「地図作り」に関わる活動を通して、主体性・協働性を培う 釜菴陽子（釧路・城山小）
- ・おみせさんごっこから、子どもの学びを考える 村越含博（岩見沢・日の出小）
- ・最後の参観日に 浜田洋子（上の国・河北小）
- ・紙芝居を演じてゆたかな楽しい授業を 井林芳枝（北海道紙芝居研究会）
- ・防災・復興教育を通じた地域再生の取り組み 村越含博（同上）

1 生活科の授業実践

(1) 釜菴報告は城山小の 2 年生が 2014 年度に取り組んだ四つのテーマ学習である。1 年生では身近な自然や人との関わりの中での「気づき」の体験を重点化し、2 年生では施設や人材への着目と地域への意識づけを目指した。さらに 2 年生ではとりたてて地図づくりという学習形態を取り入れている。

4 月、町探検で公園が桜の名所であることを知った子どもたちと、花見の時期にもう一度来ようということになったことを契機に、公園の桜を支えてきた関係者を招き、話を聞くとともに、釧路八重桜の特徴をカードに記録し、何本の桜がどのあたりにあるかを地図に落とす学習を行っていく。

5 月には博物館で町の「おたからさがし」と題したスタンプラリーを組織し、やはり地図に落とす活動を行う。同時期から平行して地域の農業改良普及センターと連携して大豆、トマト、カボチャを栽培するとともに、地域でとれる野菜について講師を招いて授業を行っている。また社会見学では地域の農家を訪問し、自分たちの栽培との違いや品筆の違いに気づいたという。

このような学習を総括するために 9 月には「鶴ヶ岱公園クシロヤエマップ」「地域のやさいマップ」「博物館で調べた釧路の自然」「ありがとう釧路川」のテーマでグループに分かれ地図作りを行い、お世話になった関係者や保護者に向けて発表したり、ジオ・フェスティバル in Kushiro の催しでも発表したりされている。

子どもたちは一連の学習を通して保護者や地域の関係者とのつながりを実感するとともに、その人たちに向けた発表によって達成感と共同の意義を感じることができたという。

(2) 村越報告は日の出小の 2 年生が取り組んだおみせやさんごっこの取り組みである。生活科の町たんけんて卸売市場や商店の様子を意識して見せ、加工や流通の過程を、ワークシートを用いて理解させてこようとしたが、「そもそも、物を売る・買うことの仕組みを子どもたちはどこまで理解しているのだろうかという疑問」が残ったという。戦後、低学年社会科で広く取り組まれたごっこ学習の成果の再検討を通じて、報告者は以下のようなねらいを設定した。

- ・ごっこを通して、物の売り買いの仕組みや関係性に気づく。
- ・子ども自身の目的的活動による問題解決的な過程を意味づける。

学年で7月、お店ごっこの学習を行うことになった。どのような店を開くかは町たんけんでは訪れた店を始め、子どもに自由に決めさせた。実施に当たっては、教師からねらいにそくした条件づけが段階的に提示されていく。まず初めに「価格の付け方」を意識させるために、一人が使っているお金は3000円、品物の値段は、持っているお金で買えるように設定する、という条件を出している。おもちゃさん、パン屋さんなどの生産と販売に関わるお店をはじめ、車屋さんを開こうとした子どもは条件から3000円で車は売れないためにレンタカー屋さんを開くことになったという。第一次のごっこで子どもたちはお店側として「どう宣伝するか」、お客の立場からはニーズに応える店か良い店であるということに落ち着いていく。同時に「品物が足りなくなった」という問題点が共通して出された。「品切れが起きないように、お店の人はどうしているのだろう」と投げかけたことで話し合いが始まり、以下のような疑問が出された。

- ・倉庫に在庫を買っておく⇒たくさん買うとお金が足りなくなる・売れ残らないよう数を考える
- ・値段が高いと売れにくいし、安いと売れやすい⇒安いと儲けられない

ここから「売値はどうつけるか」「仕入れの数はどうするか」と言う課題が子どもたちに意識されていく。

2学期に入り一学期の問題点を子どもたちに振り返らせながら、次のごっこに向けて以下の3点を条件として提示した。

- ・売り買いの仕組みに焦点化させる⇒販売に関わる店に限定する。
- ・価格や売上げを意識させる⇒貸し付け・仕入れ・返済を組み込み売上げに注目させる
- ・売り切れが出ないようにする⇒売れ残りをできるだけ出さないよう用意する量を考えさせる。

またこの2回目のごっこではごっこの中で想定される問題について子どもたちにあらかじめ話し合わせる学習を4時間にわたって行っている。

1年生をお客にした二次ごっこでは商品のできばえ、お客のニーズにあっているかがよく売れるか売れないかの理由であること、店の場所（立地）も問題であることが共通理解されたという。

(3) 二つの報告はいずれも教師の準備によって子どもは豊かな活動を経験し、達成感を感じながら学習を行っていることは高く評価された。一方で、子どもが活動を通して厳密な意味で何を学んだのか、低学年の子どもの認識形成の実態と教師のねらいの整合性は妥当であったかという問題について議論された。

釜菴報告では生活科でよく用いられる絵地図からより客観性の高い地図へ教師がどう渡らせようとしたのか、低学年の子どもの空間認識の形成がどう進んでいったのかという切り込みが弱く、まとめるためのツールとしての地図の正確が前面に出ている。学校探検にはじまる低学年から中学年での地図学習へとつなぐ空間認識の有り様は子どもの中でどのように実現されたのかをさらに検証することが必要になる。

村越報告では物を作り・あるいは物を流通させ・売ることと、そのような仕事をするこ
とで得られる対価としてのお金で物を買うという、関係をごっこを通じて体験的に把握させるこ
とが目指されている。しかしごっこの中で問題になった価格の付け方に労賃の視点が弱く、ため
に二次ごっこの結論である品質の良さという飛躍を子どもたちに許してしまっている。
品質の良さは労働の所産であることを、教育内容として 2 年生の子どもたちにどう切り出せる
かが問題となろう。

2 総合学習の授業実践

(1) 浜田報告は閉校した湯ノ岱小の中・高学年 4 名の子どもたちと取り組んだ実践である。閉
校の 2 年前から地域の宝ものさがしとして JR 江差線に伴い訪れる鉄道ファンとの交流から駅や
鉄道に対する地域の人たちの思いを聞き取る学習を行う。さらに山菜について学ぶ中で地域の
人たちがそれを加工し収入源の 1 つとなっていること、そこからガマの穂やグミ、栗など自分
なりの宝物を見つけたり、地域の川に注目してカジカやヤツメウナギなどを宝ものとして再確
認したりしていった。このような地域の自然への着目と関わって、こうれん（米で作ったお菓子）
やキノコ・山菜採り、花づくり、漬け物、蕎麦、スキー、木工、魚さばき、歌など、地域の名
人・達人・匠を学校に招き聞き取りを行っていった。閉校がせまるなかで学習発表会や閉校式
で学習の成果を、保護者をはじめ地域の人たち発表した。

自分たちのこれまでの学習は、これからの自分たちへと向かっていく。参観日にあわせ創作劇
として、「夢をかなえて大人になった 4 人が、湯ノ岱の祭りに戻ってきて集まり、小学校時代に出
会った『湯ノ岱の名人たち』をなつかしむ」というあらすじを子どもたちとつくっていったとい
う。4 人の子どもたちの未来は湯ノ岱で犬のトレーニングセンターを年配者と共に経営、湯ノ
岱で地元産の小麦を使ったパン工房を経営し、ネットで販売する、湯ノ岱の薬草を使った治療薬
を開発している、スキー選手でオリンピックに出場などであった。劇を見た地域の人たちから
は大きな反響があり、涙を浮かべる人もいたという。

(2) 二つ目の村越報告は 3.11 被災した宮城県石巻市・雄勝小学校の徳水博志実践の紹介であ
る。雄勝地区では確認されているだけでも 16.5m の津波が襲来し、236 人の犠牲者（石巻市の発
表では 2016 年 3 月段階で直接死 155 人、間接死 17 人、行方不明者 71 人）が出た。被災後、隣
町の河北中学校で間借りして実践に取り組む。震災前の雄勝小の児童数は 108 名であったが、
再開後は 41 名、うち 39 名は自宅を失っている。2011 年 7 月、子どもたちが復興市で披露した
南中ソーランが地域の人たちに勇気を与え、そのことを子どもたちも実感した。「地域の復興無
くして、学校の再生は無し」をスローガンに 9 月、学校経営案「たくましさ」と郷土愛を育てる復
興教育」を提案し、全校あげての取り組みとなっていく。とくに総合的な学習「雄勝っ子タイム」
の基本方針には、被災前のそれとは明確に異なる、子どもによる社会参画・地域参画が明確に打
ち出された。復興に取り組むホタテ養殖などの漁業や雄勝硯に代表される地場産業に関わるひ
とたちの姿を通して子どもたちは地域を動かしている人々の姿に、自分と地域の今と未来を重

ねて学んでいった。このような学習を通して、年度末には6年生が雄勝の復興と町の未来図を提案する学習に取り組んでいった。

(3) 人口減少問題が注目されはじめ、様々な問題提起がマスコミ等を通じて報道されてきている。北海道でも学校統廃合に象徴される地域の衰退が現実問題として目の前にある。学校教育は、このような現実に対して、2つの報告は、いま何を行うべきなのかを問いかけるものであったのではないだろうか。

浜田報告でも、村越報告でも、地域のモノに着目することでモノの背後にある関係に目を開き、そこから人の営みとの関係に子どもたちは目を開いてくことを通じて、モノや人と自分との関係を考え始めている。さらにそれは今がどのようにつくられ、何処へ行こうとしているのか、に目を開きつつ、時間の中での自分の位置を確かめる過程ともなっている。このような文脈の中で何のために学ぶのか、何を目指して学ぶのかという大きな学力観を、教師や大人に問題提起しているようにも考えられる。

検討ではあまり踏み込んだ議論ができなかったが、子どもたちがそれぞれの実践の過程で何をどのように学んだのかを、教師がみつめ、問うことがやや弱いように思う。個人が取り組んだ実践を、どうすれば誰もが取り組むことができる実践にできるのかという問題意識を持ちながら、仮説的でもいいので、分科会検討のための実践の指標を提示してもらいたいと思う。

3 関連する文化的活動

井林報告は北海道紙芝居研究会「かぜるん」の取り組みの紹介と、自作紙芝居「山月記」の実演であった。かぜるんは大人から子どもまで幅広い活動を行っているが、今回は小学校との関わりを中心に活動の概要が報告された。国語はもとより外国語活動や道徳、理科、生活科、算数などで紙芝居は活用されており、紙芝居の効果として集中・想像力・共感・まとめの4点をあげ、紙芝居の可能性について紹介を行った。

実演披露された「山月記」では総合芸術としての紙芝居の魅力が参加者に伝わったのではないかと思う。

前田賢次（北海道教育大学札幌校）